

## 第4章 熊本大学60周年記念事業

2009(平成21)年は熊本大学が発足してから60年目の年にあたることから、その前々年の2007(平成19)年度から60周年記念事業の計画が始まった。この事業遂行のために最初に組織されたのは、60年史編纂委員会及び60年史編纂室であった。2008(平成20)年1月30日、第1回60年史編纂検討ワーキンググループが開催され、2月14日の総合企画会議及び部局長等連絡調整会議、2月28日の教育研究評議会を経て、3月6日の役員会で60年史編纂室の設置が承認された。こうして各部署において編纂委員の選出がなされ、4月1日付で60年史編纂委員会及び60年史編纂室が発足した。

60年史編纂の目的・基本方針・編纂上の留意点は次のように定められた。

### 1. 60年史編纂の目的

熊本大学60年史(以下「60年史」という。)は、熊本大学60年間の歩みと到達点を記録し、本学の創造的発展に資する基礎資料を編纂・刊行することを目的とする。

### 2. 編纂の基本方針

- (1) 熊本大学の歴史を振り返ることにより大学の現状についての認識を深め、本学の創造的発展に資するものを目指す。
- (2) 近・現代の日本史・世界史、学術、文化、教育の発展を踏まえ、わが国の高等教育全体の中で熊本大学が果たした役割を明らかにする。
- (3) 新資料の発掘に努め、国際的な視点に立って熊本大学60年の歴史を叙述する。
- (4) 「熊本大学30年史」刊行以降の本学の発展の歴史はもとより、国立大学法人化の経緯についても論じる。

### 3. 編纂上の留意点

- (1) 教育面では、入試制度やカリキュラムの変遷、学生生活の諸相、学生の活動などにもスペースを割く。
- (2) 研究面では、グローバルCOE等外部資金の獲得戦略や民間機関との共同研究等の産学連携事業等についてもスペースを割く。
- (3) 地域貢献については、教育、医療、文化、生活など、様々な角度から叙述する。
- (4) 国際交流については、活発化の歴史、協定校との交流、海外拠点の構築などの現状と将来について記述する。
- (5) 管理運営については、国立大学法人化に伴う変更を重点的に記述する。
- (6) キャンパス・施設については、図面、写真等を収集・整理して将来の歴史資料館(アーカイブズ)に資するよう努める。
- (7) 本書の構成は、通史編、部局史編及び資料編を基本とする。

以上のような方針に基づき60年史事業の編纂が開始され、2011(平成23)年10月に写真集(資料集)が、2012(平成24)年10月に部局史編がそれぞれ刊行された。

一方、60周年記念事業について全学会議による検討が始められたのは2009(平成21)年度に入ってからのことで、同年5月28日の部局長等連絡調整会議で大枠の案が提示された。この案に基づき事業実施に向けて各担当で実務が進められ、表1に見るように60周年記念事業としてそれぞれ実施された。

表1 60周年記念事業・式典等一覧

区分	事業名	実施日(会場)
「設立60周年」冠事業	(各学部及び同窓会等で実施するシンポジウム、イベント〔熊本大学フィルハーモニーオーケストラ定期演奏会等〕等の設立60周年記念事業としての共催)	—
	ホームカミングデー	2009年11月1日 (工学部百周年記念館)
大学記念事業	記念式典・講演会	2009年11月2日 (熊本県立劇場コンサートホール)
	大学サイエンスフェスタ	2009年11月20～29日 (国立科学博物館)
	第7回熊本大学フォーラム(国際学長フォーラム)	2009年10月31日 (工学部百周年記念館ほか)
その他	第2回東京連合同窓会	2009年11月29日 (上野精養軒「桜の間」)
	The 4th Pan-Yellow Sea Rim International Symposium on Magnesium Alloys	2009年11月12～13日 (工学部百周年記念館)

設立60周年記念式典・祝賀会・記念講演会は、2009(平成21)年11月2日に熊本県立劇場コンサートホールにて執り行われた。記念式典には、文部科学大臣代理として加藤重治審議官、蒲島郁夫熊本県知事ほか近隣大学の学長、熊本県選出の国会議員、県内外からの来賓、教職員、国際交流協定を締結している海外の11ヶ国19大学の学長ら45名を含む総勢約600人が出席した。谷口功学長による式辞は次のとおりである。

本日ここに、文部科学省加藤審議官、蒲島熊本県知事、寺崎熊本副市長、有川九州大学総長、熊本県ゆかりの衆参両議院の国会議員の皆様、海外の諸大学の学長先生方及び関係諸機関のご来賓の皆様方のご臨席を賜わり、熊本大学設立60周年記念式典を挙行いたしますことは、私たち熊本大学に関わるすべてのものにとって、この上ない喜びであります。

熊本大学の歴史を辿ってみますと、例えば、医学部は250年余りに設立された再春館と蕃慈園に源を発し、また、熊本大学の母体となる第五高等学校から数えましても約120年に及ぶ歴史を有する我が国の最も長い歴史を持つ大学として、その伝統を誇っております。昭和24年、戦後の学制改革によって、熊本市に所在していた第五高等学校、熊本医科大学、熊本薬学専門学校、熊本師範学校、熊本青年師範学校、熊本工業専門学校など旧制の諸学校が統合され、新制国立大学として熊本大学が誕生いたしました。新制大学設立から数えまして今年で60周年、還暦の年を迎えます。

設立当初は、法文・教育・理・医・薬・工の6学部、附属図書館、医学部附属病院、体質医学研究所からなり、当時の大学の規模は、学生の入学定員が1,070名、教員と職員を合わせた教職員定員が1,484名でございました。

昭和30年代には建物も徐々に整備され、京町、内坪井、出水に分散していた教育学部も黒髪キャンパスに移り、昭和39年には教養部が設置されるなど、次第に大学らしくなってきました。その後、組織の拡充を図り、昭和51年に医療技術短期大学部を設置、昭和54年には法文学部が改組により文学部と法学部の2学部となります。現在では、文・教育・法・理・医・薬・工の7学部のほか、8つの大学院研究科等、研究所・センターの数も13に及びます。更に医学部附属病院を有しており、学生総数約1万名、教職員数約2,000名からなる中核的な総合大学に発展して参りました。この間、今日まで、本学は10万人を超える有為な人材を社

会に送り出して参りました。

平成16年には、我が国の国立大学は「国立大学法人化」という歴史的な転換があり、本学は、「教育基本法及び学校教育法の精神に則り、総合大学として、知の創造、継承、発展に努め、知的、道徳的及び応用能力を備えた人材を育成することにより、地域と国際社会に貢献する」ことを目的として新たにスタートいたしました。

もとより、今日の大学の社会的使命は、教育（人材育成）、研究（知の創造）、社会貢献（教育や研究の成果の社会への還元）の3つに集約されます。熊本大学では、教育研究組織を、生命科学系、自然科学系、人文・社会科学系の3分野に大括りし「人の命、人と自然、人と社会」の諸科学の深化を通して、総合大学として教育と研究のバランスのとれた発展を図り、その成果を社会に還元していきたいと考えております。更にグローバル化した社会の中で、我が国のみならず、世界を視野に入れた国際交流も活発に行っております。現在では、大学間・部局間の協定を、世界27ヶ国、93の機関と締結し、海外に2ヶ所のオフィスを構えるに至っております。

来年度からの第二期の中期目標計画においても、その前文に、

熊本大学は、生命科学、自然科学、人文・社会科学の各分野にわたる、充実した学部、大学院、研究所等を備えた、我が国を代表する研究拠点大学としての役割を果たす。そのために、アジア諸国はもとより広く海外の諸大学等との人的・文化的交流を通じて、「人の命、人と自然、人と社会」に関する活発な研究活動を推進し、その成果を基盤として教育・研究の国際性を高め、大学院教育においては、国際社会のリーダーとして活躍できる先導的研究者及び高度専門職業人を養成する。学部教育においては、その基礎としての幅広い教養を持ち高度な課題解決能力を有する人材を育成する。また、教育・研究活動の成果を活用して、広く地域及び国際社会に貢献する。

と記載させていただいております。

特に、重要な3項目として、第一に、

1) 学生が豊かな人生を送るための支援としての知力を獲得するための「教育」の強化すなわち、教育においては、今後ますます必要になる総合力の源としての教養教育の重要性に十分配慮して一貫した教育体系の整備が重要と考えています。

第二に、

2) G（グローバル）-COEをはじめとする特色ある研究の推進と研究力の強化があります。

研究面において、世界のトップでありたいと考えています。現在、自然科学分野ではG-COE研究として推進されている衝撃エネルギー科学研究や、新しい環境負荷の少ない熊大マグネシウム材料研究等は、社会から注目されているところです。生命科学分野では、発生医学研究やエイズ学研究の2つのG-COE研究をはじめとして、先導的な研究が数多く進められているところです。人文・社会科学分野では、今後、その研究の特徴を活かして、新しいG-COEレベルの研究の推進を目指したいと考えています。特に永青文庫研究センターは、社会からも、今後世界的な教育研究拠点として発展して欲しいとの大きな期待が寄せられています。

そして、第三には、

3) 留学生の倍増を目指すなど大学の国際化に向けての国際交流の強化を挙げています。

現在本学は、約三百数十名の留学生が在籍していますが、それを、できるだけ早い時期に500人とし、将来的には、10人に1人が留学生、すなわち、世界の各国から1,000人の優秀な

留学生が熊本大学に来て学んでいるという状況を目指したいと思います。学生諸君が、国際的な環境の中で学び、卒業後、世界を舞台に活躍する際に、多くの学友が世界の各地にいて互いに助け合うことができるような大学を目指したいと思っています。一昨日も世界各地の25大学等から学長あるいは副学長先生に熊本にお集まりいただいて、「International Presidential Forum：世界学長フォーラム」を開催し、グローバル化社会の中での大学の国際化と人材の育成のための国際的な連携について協議したところです。

もちろん、これらの課題のほかにも地域医療や先端的な高度医療の担い手の育成等、現在多くの課題に取り組んでいるところですが、この3点を当面の課題として掲げて取り組んでおります。

設立60周年という節目を迎えた今年、私たちはこれまで本学を築き上げ支えてこられた歴代の学長はじめ、関係の皆様方のご苦勞に思いを馳せ、そのご尽力に深く感謝しつつ、これからの熊本大学の新たな飛躍に向けて行動して参ります。

先人たちの残した伝統の豊かな香りを受け継ぎ、未来志向の研究拠点大学として、世界のリーダーを育成して参ります。また、地域の誇りであり世界から憧れられる存在として、皆様と共に、その新しい未来を創り出して参りたいと思います。

熊本大学は、在学生、卒業生、職員、それに地域の皆様が、誇れる大学であり、社会から憧れられる存在として、また、地域に根ざしてグローバルに展開する大学として発展する決意を新たにしているところでございます。

ご来賓並びに関係各位におかれましては、今後とも、私どもへの、一層のご支援のほどをお願い申し上げ、60周年記念式典の式辞とさせていただきます。

本日は、誠に有り難うございます。

平成21年11月2日  
熊本大学長 谷口功

式典終了後には記念祝賀会が催され、約130名の熊本大学関係者が60周年を祝した。

同日午後からは、スペシャルオリンピックス日本名誉会長の細川佳代子氏及びソニーコンピュータサイエンス研究所シニアリサーチャー茂木健一郎氏による記念講演会が開かれ、一般市民、学生、教職員合わせて約1,700名が参加した。

このほか、設立60周年記念特別番組「挑戦！ CHALLENGE 熊本大学」がKAB熊本朝日放送で制作され、12月26日に放映された。

以上のように、60周年記念事業は従前の周年記念事業とは異なり、本学の現況に関する学外での展示会、あるいは、地域社会や国際社会を対象とする講演会やシンポジウムを開催するなど、広い範囲を対象として実施された点に特徴があり、本学を取り巻く環境がこの60年の間に大きく変化したことを感じさせる。



写真1 設立60周年記念式典